

## 都市の市民からの視点

川口啓明  
科学ジャーナリスト

Environmental education and citizen  
Kawaguchi, Hiroaki journalist

Various kinds of movements for environmental protection have been built by Japanese citizen in many places. These movements are in part an result of environmental education for citizen up to this time. But, these environmental education until now have so many weak points that these education by traditional ways will be faced with more and more difficulties. Then, environmental education for citizen with new concepts are proposed. These concepts are "eco-region" that comprises zones of natural environment and humanized environment, and reconstruction of civil community of this eco-region. Natural environment-zone contains core-area like that of MAB (Man and Biosphere) project by UNESCO, and humanized environment-zone holds city and agricultural area.

キーワード：natural environment, humanized environment, citizen

「環境教育」という言葉の意味するところは、かなり幅広いと予測できる。筆者は、消費者運動の周辺で活動しており、ここでは環境教育の課題を、われわれの大多数が住む都市において一般の人々に対するものとして考察したい。

### (1)都市の市民の環境への関心

環境問題とはどのようなものは次節で整理するとして、まず市民と環境とのかかわりについて概観してみたい。全国各地の生協（消費生活協同組合）などでは、以前から環境問題への取り組みがなされている。環境保全をめざした「より良い洗剤」の普及活動、家庭排水のチェック活動や地域の水質調査活動、大気汚染調査活動などが、多数の主婦（生協組合員）の参加のもとに取り組みられてきている。生産者と消費者が協力した産直運動、有機農業運動の推進なども、人為的な農業生

態系の保全という点では、環境問題への取り組みの一つと言えるだろう。また生協だけでなく、各地で市民が中心となったリサイクル運動や、緑の街づくり運動なども積極的に行われている（環境庁編、1989a）。

これらの取り組みを眺めてみると、都市の市民による環境問題への取り組みは、主に三種類に大別できる。一つは、家庭排水のチェックの活動などに見られるような、日常生活が環境へ及ぼす影響の重視であり、これは、「地球にやさしく」「環境をよごさない」などの標語のもとに行われている。二つ目は、古紙のリサイクル運動に見られるような、資源の有効利用の重視であり、「資源再利用」「省エネルギー」などの標語のもとに行われている。三つ目は、地域的に特有な自然環境の保全や、都市での生活環境の改善にかかわる活動で、ナショナル・トラスト運動や街づくり運動な

どが、これに当たる。

このような三種類の取り組みが行われているのは、マスメディアの影響とともに、これまでの一般市民への環境教育の成果でもあるのだろう。とりわけ、前二者の取り組みでは、環境問題の深刻化が広く知られるようになったことが、大きく原因していると思われる。このような経過からすれば、環境問題の取り組みに市民の積極的な参加を促すには、今後も、環境問題の深刻さについて適切な情報を伝えるという環境教育の努力がさらにいっそう必要であろう。

一方、三番目の取り組みでは、さらに、都市の市民の自然との触れ合いの欲求が基盤にあるように思える。都市での劣悪な生活環境、自然環境と大きく断絶された生活様式のもとでは、豊かな緑、さわやかな大気、清浄な水辺、あるいはレクリエーションの場での自然との触れ合いを強く希求するようになるのは当然と言える。また、多くの親は、子供が人間らしく成長するには、自然との触れ合いが必要であると感じる。「人間らしく」ということの内容の定義はむつかしく、曖昧であるものの。

しかし一方では、このような自然との触れ合いの欲求の高まりに対応して、自然環境破壊をもたらすリゾート開発などが進展しつつある現状からすれば、どのような仕方でのこの欲求を満たすのが望ましいかを明確にすることも、都市の市民への環境教育の重要な課題となろう。

このような環境教育の課題から逆に考えてみると、環境問題には、対応する二つの側面があることが分かる。

## (2)環境問題の二つの側面

環境とは、『環境科学辞典』（荒木ら編、1985）によれば、「生物の生存に関係する多種類の外的条件のすべてである」と定義されており、環境作用（環境からの生物への働きかけ）と環境形成作用（生物による環境の改変）があり、人間は「人工環境下での生活が自然環境下での生活より多いといえる」と述べられている。

つまりは、人間は自然環境のもとで、自然環境

から自らを分離、隔離する生活環境（人工環境）を歴史的に作り出してきたと言えるのであろう。地球上に最初に登場してきたヒトは、主に自然環境のもとで生活していたのだろうが、ヒトは自らのまわりにさまざまな遮蔽物、人工物、そして社会を作り出して、自然環境と生活環境を自ら分離させてきた。その結果、環境問題が生じてきた。

現在の環境問題の一つの側面は、自然環境と生活環境との不調和によって生じている。この不調和の結果、人間のヒトとしての生存基盤が崩壊してきている。前節で述べた「地球にやさしく」や「資源再利用」などの取り組みは、この側面に主に関係しており、これに関する話題はマスメディアでしょっちゅう取り上げられている。

環境問題のもう一つの側面は、人間（ヒト）と、自らが歴史的に作り出してきた生活環境との不調和によって生じている。生活環境のなかの人間（ヒト）の人間らしさ（ヒトらしさ）の侵食という側面である。前節で述べた、自然との触れ合いの欲求などを基盤とする取り組みが、この側面に関している。

もちろん、このような二つの側面の環境問題は、自然現象として発生したのではない。都市化に伴う環境問題は、人類が狩猟採集生活から農耕牧畜生活へ転換した時からあったのだろうが、深刻化したのは第二次世界大戦以降のここ数十年のことと言えるだろう。

自然環境と生活環境の不調和での環境問題では、地球的あるいは地域的な規模のものとして、大気汚染、水質汚濁、酸性雨、森林破壊、動植物の種の減少など、さまざまな問題が話題になっている。このような問題の発生原因を考えると、大きくは二つあげることができよう。一つは、フロンガス、酸性雨などに見られるように工業生産の拡大である。もう一つは、森林破壊、砂漠化、土壌流失などに見られるように、世界的な仕組みとして農業生産が適切に維持されていないことである。一例としてあげれば、日本のように大量の食糧・食料・食品の輸入を行っていれば、国土に流入する窒素やリンによる水質汚濁という環境問題が発生するのは、当然と言えば当然であろう。

人間と生活環境との不調和では、自然環境と生活環境からの観点からすれば跛行的で無計画な、経済効率優先の都市化や、それに伴う子供の生育・教育環境や大人の労働環境の悪化、そして多種多様な過剰な商品の氾濫（この点では近代文明を批判したツイアビの『パパラギ』の警句が参考になる）などを原因としてあげることができるであろう。

このような二つの側面から環境問題をとらえた時、どのようなことが、一般の人々に対する環境教育の骨格となるだろうか。

### (3)環境教育の骨格

自然環境と生活環境の調和ということからすれば、考え方の全体的な枠組みとしては、一つは、ユネスコのMAB（人間と生物圏）計画（吉田ら、1989）が参考になる。MAB計画では、自然保護上の価値、学術的価値、あるいは持続的開発を進めるための価値をもつ生物圏保護区が、1988年の時点で世界70か国、269か所に設置されている。この生物圏保護区は、自然保護を軸格に行う核心地域（コア・エリア）、人間が活動を行う周辺の緩衝地帯と移行地帯という、通常は三区域からなり、日本でも屋久島、大台ヶ原・大峰山、白山、志賀高原の4か所が生物圏保護区に指定されている。

もう一つの参考になる考え方は、都市を一つの生態系としてとらえるというものである。環境庁は1989年版の環境白書で「エコポリス」という考え方を強調している。都市を「一つの有機的な系としてとらえ」「都市における様々な活動や構造を生態系が有する自立・安定的、循環的なしくみに近づける」（環境庁編、1989b）ということである。このようなエコポリス（生態的都市）といった考え方は従来からあるし、都市でのエネルギー収支や物質の流れが、周辺地域を含めて整合性がとれていなければ、長期的には都市が維持不可能であることは自明である。

さて、MAB計画と生態的都市の考え方を組み合わせて、自然環境と生活環境を調和的に組み立てられ得る地域的な系を想定できないものかと、

筆者は考えている。MAB計画は、かなり広い区域を生物圏保護区の対象としているが、MAB計画の中心にある自然保護についての考え方は、小面積の区域にも適用できるのではないだろうか。つまり、都市一農耕地域と自然保護を行うコア・エリアを一つの地域に含ませ、一つの地域内で生活環境（都市一農耕地域）と自然環境を調和的に配置させるのである。人間も生活でき、自然環境も保全できる、生態的に安定的な一つの系としての、言わば「生態的地域」とでもいうものの想定である。この地域内には、条件に応じて、かなり大規模なコア・エリアを設けることもできようし、また、都市一農耕地域のなかに小規模なコア・エリアを併設することもできるだろう。これらの大小のコア・エリア周辺の緩衝地帯では、都市の市民が自然と触れ合うこともできるだろう。そして、このような「生態的地域」が世界中で確立されてこと、地球の規模の自然環境破壊も防げるように思える。

このような人間と環境とのかかわりのイメージが、都市の市民に対する環境教育の基本的な骨格となるのではないだろうか。東京への通勤圏の地域には、「地域開発」によって住宅地が作り出され、そこに移り住んでいる人たちがたくさんいる。そして、それらの人たちの多くは、自分たちの移住や生活が、自然環境の破壊を伴っていることに気付いている。彼らが、自然環境と生活環境の保全や改善に積極的に取り組むようになるには、自らの存在を悪と見なすような考え方ではなく、人間と環境とかかわりの積極的・肯定的なイメージが必要であるように思える。「生態的地域」といった考え方は、この基盤になるのではないだろうか。つまりは、その地域で生活し暮らすことが悪いのではなく、地域全体として見た時に、自然環境を保全する区域がなく、自然環境と生活環境の調和がとれていないことが問題であるという把握である。

もちろん、このようなイメージが把握できたらと言っても、環境問題の解決に向かう道が容易でないことも事実である。ここで述べたことから浮かび上がってくる環境問題の焦点の一つは都市化

の問題であるが、経済効率優先の現在の都市化に実際に対抗するには、多大の困難を伴う。また、都市と農耕地域との関係で言えば、都市農業あるいは都市周辺農業の維持が重要な課題になるが、都市農地に宅地並課税を行い、大量の食糧・食料・食品の輸入に傾いている日本の政治の現状では、これにも多大の困難がある。さらに、各種の工業製品は、最終的には廃棄されることや、物質循環させることへの配慮なく、ワン・ウェイの物質の流れとして、次々と生み出されてくる。これらに対抗すること、つまりは環境問題への取り組みは、われわれの社会のあり方と、われわれの生活様式そのものを問うているのである。困難が多いもの当然である。

ここまで述べてきたことが、環境問題の全体像と言えらるだろう。環境教育は、このような環境問題の全体像を伝えるものでなければならないであろう。なぜなら、このような環境問題の全体像が把握できてこそ、解決の方向が明らかになり、それぞれの個別的な環境問題での取り組みや活動を適切に位置付けることができるからである。このようなことから、環境教育は、環境問題の全体像が把握できるものでなければならないと思える。しかし、これにも困難を伴う。

#### (4)現在の環境教育の弱點

一般の人々への環境教育では、マスメディアのかわりを無視できない。地球的規模の環境問題では、ここ数年さまざまな情報が、テレビ、新聞、雑誌などのマスメディアから報じられた。これらの報道は、一般の人々が地球的規模の環境問題へ関心を抱くうえで実際に大きな役割を果たしたが、環境問題の全体像を知るといううえでは問題点も多い。

マスメディアは、情報をしばしばセンセーショナルな形で報じるとともに、情報を断片化しており、その情報を理解するための科学的知識や、問題の社会的背景についての情報の伝達をしばしば欠落させている。このため、マスメディアからの情報を受け取る側は、情報不足、知識不足のもとで、全体像をつかめず、たいていは対症療法的な

性急な結論、考え方、行動しか導き出せないことになりやすい。また逆の方向としては、マスメディアが環境問題の深刻化を断片的に報じれば報じるほど「どうしようもない、なるようにしかならない」と諦観してしまう人を増やしてしまっているようにも思える。

マスメディアによる情報提供だけでなく、各地の生活協同組合、市民団体、公民館などで取り組まれている、一般の人々に対する環境教育でも、事情はほぼ同じであろう。これは、伝えるべき内容がたくさんあることが主な原因となっているだけでなく、一般の人々に対する環境教育の時間が、通常は十分に確保できないことも、大きな原因となっている。たいていの講演会や勉強会は、1回限りの2時間程度である。講演会や勉強会を連続的に開催することは、主催者、講師、聴衆ともかなりの努力を要する。

豊富な内容を短い時間で伝えるとなると、毎週講義を行う大学でのような情報伝達、教育の仕方では対処できない。このため、一般の人々に対する実際の学習会、講演会などでは、意識操作的な手法が用いられることになりやすい。これらの手法には怒りや憤慨を湧き立たせる、危機感を煽る、功利的・打算的な考えに訴えるなどがある。

しかし、これらの手法には欠陥がそれぞれ伴う。怒りや憤慨を湧き立たせる手法は、環境問題の深刻化を直観的に把握させるには効果的であるが、怒りや憤慨を日常的に持続させることはむづかしい。危機感を煽る手法では、全体像の把握よりも、ある特定の危機のみに関心が集中され、この特定の危機が何らかの対症療法的な対応策で避けられ得るといようなことになると、比較的簡単に関心が薄らいでしまう。功利的・打算的な考えに訴える手法では、通常では、ある特定の未来予測のもとで外部不経済的な損得を論じるので、不確定で曖昧な要素が多く、全く正反対の結論が引き出されるようなことにもなりやすい。こういふことから科学技術が進展すれば、環境問題などどうにでも解決できると思っている人も多い。

現在、行われている一般の人々に対する環境教育が、このような弱點を持ち、これらの情報提供

の仕方が不十分であることは明らかだろう。これらの弱点を克服する道の一つは、やはり情報提供の仕方をなんとか工夫していくことであろう。これが本筋でもあろう。しかし、今後も困難が多いことは確実である。現在の環境教育は、いい加減に取り組みながら弱点を持っているというよりも、かなりの努力がなされて、現状のようになっているのだからである。とすれば、視点をかえて、特定の人が「教え」、市民が「教えられる」という関係のもとで環境教育を進めるのではなく、もっと別な角度からの工夫は考えられないだろうか。

#### (5) 地域の再発見

第3節で、環境教育の骨格として「生態的地域」ということを述べた。しかし、実際に地域というものに注目した時、一般の人々と地域とのつながりがすでにかなり失われているということに気付く。地域での人間同士の接触も、地域の自然環境についての人々の体験や知識も希薄になっている。

高度経済成長期以降、地域共同体が崩れ、核家族化が進行し、夫が会社人間と変わるなかで「母子家庭」構造が形成され、さらに生活環境が変貌して母子も分離され（家庭内の個食に表象される）、こうして地域に住む人々はばらばらに分散されてきたと言えるだろう。

このような状況のもとで、第1節で述べたように、地域では母親（主婦）が比較的人間的つながりを保ち、生協運動、市民運動などで環境問題に取り組んでいるのであり、「女性運動が活発化」などとマスメディアに取り上げられる。しかし、このことは地域での生活環境というものを考えた場合、いかにもいびつである。「女性運動」だけでなく、本当はこれに対応するような「男性運動」も地域になれば、生活環境が全体として改善されるとは思えない。一般の人々への環境教育と言いつつ、ここで分析したのは実際には母親（主婦）への環境教育なのであり、ここにも一般の人々に対する現在の環境教育の持つ弱点が現れている。

このようなことからすれば、現在の環境教育の

困難のいちばん根底には、実は、地域の人間同士の結び付きの崩壊があると思える。環境教育は、この問題意識から出発しなければならないのではないだろうか。筆者は「地域の再発見」ということを講演会などでは言うようにしている。地域の生活環境と自然環境を、地域の人々が自ら知っていくことの強調である。つまり、特定の人が「教える」、市民が「教えられる」という関係のもとで環境教育を進めるのではなく、環境教育を地域の人々に自らの課題として送りかえすのである。地域の人々が、地域を自らもう一度取り戻し、発見し、地域全体として、どのような環境をつくり、都市化を行っていくのかという共通意識を追求していくなかで、これからの環境教育の新たなやり方が生み出されてくるのではないだろうか。また、このような方向でないと、環境問題の解決もむづかしいように思える。

#### 文 献

- 荒木ら編 (1985), 環境科学辞典, 東京化学同人, P. 149.
- 環境庁編 (1989 a), 環境にやさしい暮らしの工夫, 大蔵省印刷局, pp. 116-53.
- 環境庁編 (1989 b), 環境白書, 大蔵省印刷局, p. 52.
- ツイアビ (1920), パパラギ, E・ショイルマン・岡崎照男訳, 立風書房 (1981), PP. 49-58.
- 吉田ら, 「MAB 計画って何だろう?」自然保護, 321:10-13, 1989.

